

ぬご苦勞をされ、生死をさまよわれたことでしょう。私も一人前に苦勞して帰って来たと思うので、一筆書かせていただきました。

皆様のご健康をお祈り申し上げます。

欧州ロシア抑留記

和歌山県 那須 淳 男

まえがき

シベリア抑留記を書いていただけませんかと要請されて、はっとした。抑留生活を終えて帰還した当時から、抑留の記録でも書いておのれの体験を残して置きたいと思いつつ、書き始める機会がなく、そのうちそのうちと思ううちに月日は容赦なく流れて行く。遂に記憶すらだんだんと薄らいでいく。なおさらに書き出す機会を捉えることができず、なんと丸三十二年の月日が流れた今日、文才もなければ浅学非才の身、人様に見ていただくようなシベリア抑留記なんて到底書けるものではありません。

せん。しかし三栖遺族会が会史発行のため、ぜひ支援をと要請されるままに、断ることもできず、最初からおのれの考えていた記録だけでも書いてみてからにいたしましよと返答を申し上げ、昭和五十五年正月三日間、夜を日につき、当時を回想しつつ、走り書きで書き終わりました。我ながら感心したくらい、当時の苦しかった日々連続は脳裏に焼きついてあるのか、案外次々と日記でもたどるごとく書き綴ることができました。

しかしまだ後で、あれもこれとも思い出すこともありますし、要所要所を書き綴りましたので、物足りない点多々あるうかと思われますが、ご容赦願います。

昭和二十年八月五日付、関東軍野戦自動車廠通化（関東軍最後の陣地として重要拠点）支廠副官を拝命、八月八日午後十一時五十分、新京駅発列車にて赴任のため出発、翌九日午前四時半、四平街駅に到着するや、空襲警報発令、乗客全員附近に疎開、警報解除とともに列車は通化に向かい出発。そばの乗客のひそひそ話によれば、いよいよソ連軍が不可侵条約を破棄し、ソ満国境より進

攻を開始したらしいとの情報話しをしている。まさかと思いつながら、空襲警報もあり、車内もなんとなく不穏な空気に包まれた感じがした。通化到着と同時に支隊長より詳細を聞き、関東軍として最悪の事態であることを知った。

本隊長より命令により「貴官は軍属・家族の疎開のため、現地調査、設営のため朝鮮平壤に出張を命ず。速やかに出発せよ」の命を受け、十一日平壤に到着。警察・憲兵隊と連絡の上、諸学校と連絡、疎開準備を進め、八月十五日を迎え、本日より満州方面との通信が絶えて、新京との連絡も不能となり、すべて独断で事を運ぶより方法はなく、停車場・司令官とも連絡の上、疎開列車が到着の際は南鮮に流すことを決意。待機しているうち、十七日疎開第一陣の列車が到着し停車場へ引き込まれた。

停車場司令官のはからいにより、南鮮の釜山に向かわせた。十八日より、それまでは日本人により運営されていた北朝鮮鉄道は朝鮮人と逐次交代するようになり、停車場司令部の機能も停止するに至り、朝鮮人職員をなん

とか手なずけなければ列車の操車もままならず、金品を送り有利に操車を依頼し、自隊の疎開列車を南鮮に流すことに成功し、次々と南鮮へ南鮮へと送り出した。

最後に本隊長小山大佐以下軍人も、戦争終結して満州に駐留の必要もなく、動員用の自動車二百台を動員、新京より通化まで自動車行軍、通化より列車で平壤に到着、私より今日までの結果報告した後釜山に向かったが、私の所属する通化支隊要員が未到着のまま、二十五日を迎え、平壤に来て以来起居をともにしていた憲兵隊が今夜十一時の京城行きの最終便で京城へ出発する、貴官も同行しませんか、明日ソ連軍が進駐して来ます、軍人は全部ソ連に連行されますよと南鮮行きを勧められた。

しかし、通化支隊要員が未到着である。これを放置して南鮮に行けば私は命令違反になる。命令はいかなる事態を迎えようと守らなければならない。いたしかたなく、連絡要因として来ておった下士官以下五人を憲兵隊に依頼、京城へ出発せしめ、一人で平壤に踏みとどまった。この決断が私の運命を左右し、遂にシベリア抑留の

第一歩となつたのである。

翌二十六日、ソ連軍が進駐し、日本軍の武装解除をすると同時に、朝鮮自警団を組織し、日本軍の兵器を手渡したため、彼らは戦勝国気取りで威張り散らし、事ごとに撃つぞ、撃つぞと銃を構え、我々日本人の行動は阻害され、朝鮮人に対し感情的にも最悪であった。

武装解除後、日本軍人は、日本軍の演習場であつたみろく洞には将校、三合里には下士官兵が集合するよう指示され、各部隊はばらばらに指示された収容所へ向かつた。私はソ連軍の指示により、周囲には自ら鉄条網を張り、糧秣も日本軍の車で倉庫にて受領して行く。収容所は、自主的な運営で事足りる生活を送ることができたが、日本人として風呂のない生活は耐え難い日々であつた。

この収容所に入所して以来約二か月、十月二十四日、いよいよ移動のための出発の日が来た。ソ連軍からの話では、興南港よりウラジオストク経由ヤボン・ダモイ（日本へ帰還の意味）と言うのみで、反面、被服類・その他の所持品は捨てずに一切携帯するようにと指示もあつた。平壤より興南に向かつて列車は出発した。途中

ある小さな駅で、朝鮮人が我々に対して、本当にお気の毒ですが酷寒のシベリアへお出になられるそうですね、日本に帰りたいでしょうが、と意地悪気に語りかけてきた。なにぬかす、日本に帰るんだよと言ひ返したかつたが、日本に帰還の確報も聞いてなし、半信半疑で彼らの語りかけを聞き流すより仕方がなかつた。

いよいよ移動が始まつて以来、給食は極端に量・質ともに悪くなり、さらにシラムの発生がおいおいと見かけるようになり、寒くなる一方で、朝鮮人の話もあり、いろいろの情報を総合してお先真暗で、みな溜め息ばかりである。貨物列車で横に寝ることもできない。座つたまままで列車は興南へと走り続けた。

翌朝、ようやく興南駅に到着、数年前、活気あふれる興南を見たことがある私には、鮎川義助氏の経営により股販を極めた興南窯素KKも、今は完全に操業を停止し、広大なる工場全域は廃墟のごとく静かな光景に接し、世の栄枯盛衰を目のあたりまざまざと見た私は、日本の大進出政策の末路を、全滿州にこの光景が展開していることを思い寂寥の感に打たれた。やがてソ連軍の

指示により、この大工場の一角にある社員宿舎に収容され、久しぶりに昼の感触を味いつつ、落着いた二日間、滞在後、乗船命令にて興南埠頭に到着と同時に乗船開始、千二百人の将校梯団は一時間余りで乗船完了と同時に、船は岸壁を離れていった。

船は日本から迎えに来てくれた船ではなく、赤旗を掲げたソ連貨物船である。これからはあなたまかせ、いかんともすることもできない。平壤で聞いた興南—ウラジオ—新潟航路であるよう、内心祈りつつ、平穩な航海で翌日昼過ぎウラジオストックに入港して岸壁に接岸もせず出港。いよいよ新潟に向かうのかと思えば、船はエンジンをとめたまま昨日来た方向に流している様子。夜が明けてエンジンが始動、陸地に接近して行く。みんな甲板に出てだけれが、あの島は佐渡ヶ島だ、新潟が近いという。佐渡ヶ島はこんな小さな島ではないと言う者もあり、さまざまな観察が出る中に、ここはソ連領のポシエツト港だと、琿春の国境監視哨に勤務したことのある将校が確言され、まさかこんな港で下船を命じられるとだれが予想した人があったろうか。奥深くに港があり、

入港した。ここでもソ連軍係官が二日間荷役をした後、新潟に向かうと言うのである。まだ自己に有利な言葉もみんなは信用しなかった。いよいよ荷役が始まった。満州、朝鮮から集積した軍需物資を満載してある。荷役のための使役も割当てられ、酷使された。

二日間の荷役を終わった十一月二日の午後三時ごろ、全員下船の命令が出て、みんな来るべきものが来たと、ようやくあきらめの表情が隠し切れなかった。折から吹きすさみ、ソ連の北の風が身にしむ思いで下船した。いよいよシベリア抑留の第一歩を印した。これから先、どこに送られ、どこで何年、いな永久に消えるかも知れない。先のわからぬなぞの国、ソ連のなすがままに従わざるを得ない。身の不安に包まれつつ、ここポシエツトでは宿舎に入ることもなく、小雪の降る中、一枚の持参した毛布にくるまり、木陰にてみんなで寄り添い一夜を明かした。

翌朝、夜明けとともに海岸沿いに歩いて、クラスキエに向かうこととなった。食事は極めて少量、空腹をこらえて歩み続ける。リュックサックの荷物が肩に切れ込ん

でくる。少しずつ不要のものから放りだしながら、黙々と歩いた。武装解除のとき、日本軍人の魂として特に携帯を許可された腰の日本刀も何のおしみなく海中に投げ捨てた。

夕方、みんなばらばらで目的地クラスキーに逐次到着した。ここは民家も何もない海岸の広場で、日本製の九五式幕舎が所狭しと張られ、すでに日本軍兵士も一部に入っておった。また別の方向には満州延吉・敦化方面から、日本軍自動車隊の輸送する軍需物資が山のごとく積み重ねられ、武装解除された兵器も所狭しと積まれてあり、さらに驚いたことは、建物より取りはずした古い建具や家具類がこれまた山のごとく積み上げてある。戦後の復興に役立てるつもりであろうと想像される。

やがて幕舎を割当てられたが、照明は何もない。おの幕舎にもぐり込む。しかし、上を向いて寝る広さはなかった。横寝になってようやく割当て人員が収容できた。一度用便に立ち上がると、そばの人はあお向けに転がる。もう寝る場所がなくなる。だれかが用便に立ち上がるまで座って待つというまことに苦しい生活である。

ときどき暖炉をたく薪もソ側から支給されず、みんなで薪とりに裏山へシバをとりに行く。

十一月十五日には大雪が降り積雪十五センチも積った。いよいよ本格的な敵冬の訪れであろう。十一月二十日に移動式シャワー車が来て、朝鮮で收容されて以来初めて丸三か月ぶりの入浴である。入浴といっても、洗面器一杯の湯で体を洗って流すシャワーである。別に衣類を熱気消毒をし、シラミ退治してくれるのが何よりの慰めである。

十一月二十五日ごろから逐次移動の話がだれからとなくささやかれるようになった。それは各人所有の被服の調査があり、それをもとに不足被服は支給される。次いで防寒被服（旧日本軍のもの）を新たに支給されたにもかかわらず、まだウラジオ経由新潟ダモイを信ずる者もおったが、大半は、防寒被服の支給で、内地帰還はあきらめた。いよいよ十一月二十八日夕方、鉄道終点のクラスキー駅に四十両編成の貨物列車が入った。どこへ行くとも目的地不明の出発命令が出て、二十九日朝から一両に四十人乗車完了、と同時に出発した。

各人の荷物もあり、みんなで座ったままで寝ることもできない。中央部に暖炉が設置してあるが、薪は何も支給されない。みんな座ったまま仮眠である。明けて三十日、シベリア本線ウラロシロフ（有名なニコリスク事件のあった所）駅に到着した。ウラジオに行くかシベリア方面に北上するか分岐点である。運命の分岐点でもあった。到着と同時に、各車両から二十人ずつ人員を差し出すよう指示あり、指揮官の引率で初めてソ連の町へ出て行った。

いろいろと変わったものが目について珍しかった。特に驚きだったことは一般大衆の服装であった。日本の乞食でもまともでないぼろぼろの被服をまとってあって、町を歩む人のほとんどが同じようなぼろぼろの、仮装行列かと思うような状況であった。ソ連大衆はいかに物資の欠乏に耐えて、戦争を勝ち抜いたかが窺えた。

一行は大きな倉庫に入って各人に渡された物は、長さ二メートル余、幅四十センチ、厚さ八センチの板である。一枚担いで列車に帰ってきて、二段に棚をつくり、土間と三段にして各自寢床を決めた。これで昨夜来のよ

うに座ったままで寝ることから解放されたが、さあこれからが大変である。遂に朝鮮からここまで、夢にまで見えてきた新潟ダモイの夢は消え果てたのである。

では、これからどこに行き、何をするのか。戦争が終わってからの何の目的で連行するといふのか、なぞである。ソ連輸送指揮官に聞いたが、ソ連の輸送は最終目的地は絶対に公表せず、このたびの輸送にもハバロフスクまでは答えてくれたが、それから先は不明である。次はハバロフスクで指示される。列車は一路ハバロフスクに向かい終日、終夜走り続ける。

二日目の朝、ある駅に停車した。駅名を見るとイマンである。去る昭和十一年、東部ソ満国境要塞築城のため、東安省虎頭に駐留の折、朝夕ながめたイマンの駅。今捕虜として輸送途上、反対に虎頭の山々をながめようとは当時想像だにできなかったことである。イマンを過ぎたころから、外は白一色、零下二十度に下がる毎日、暖炉は設置してあるも、薪は全然支給はなく、鉄板一枚の貨車の内側は霜が真っ白に付着し、列車の揺れるたびに天井や側板からバラバラと霜が降る毎日の車内で

ある。外から鑼をかけられ、小窓も寒さのため閉ざして、昼夜の別なく暗い。

一日二回の食事は大豆の煮たもの、小麦の精白のしなもの、煮たもののかゆ、エンバクのかゆのいずれか。毎食飯盒のふたに一杯が限度。それに一日一回、三百グラムの黒パンが支給され、副食は塩味程度で何もない食事の毎日である。

ハバロフスクも、夜間、いつの間にか通過し、列車は走り続ける。遂に満州対岸の最後の町チタに停車した。

外は零下二十度。昭和十二年十二月、満州のハイラルに西部国境の部隊に補給輸送のため派遣されたとき、チタの対岸の町満州里にたびたび行動したとき、国際列車がチタの駅と交互に行き交う様を眺め、チタの町を指呼の間に眺めた当時を思い出し、感無量のものがあつた。

いよいよ列車は満州周辺に別れを告げ、西へ西へとソ連に深く進んで行く。このころから雪はいよいよ激しく降り、除雪車の走っているのが見受けられた。列車で走りだして九日走り続けて、極東の一番古くて大きいイルクーツクに到着した。駅も立派で大きな町であることは

わかるが、雪にすっぽり覆われ、白銀の町としか思わなかつた。

汽車はさらに西へ進んで、十二月九日、バイカル湖畔のバイカル駅に停車した。バイカル湖は周辺が凍結し、中央部はまだ水面が凍らずに見えていた。ソ連指揮官より、燃料をやるから袋あるいは箱を持って各車から三名ずつ集合せよとのこと、喜び勇んでついて行つた。ところが列車に積載してある石炭をおろせと言うのである。仕方なく懸命に石炭おろしを行い、完了まで四十分、空腹と疲労と石炭のほこりで真っ黒になり、いよいよ強制労働の始まりかと、これから先が思いやられた。その労働の報酬として石炭を少しばかり支給された。列車に帰り早速燃やして、火力による暖をとることができた。ふと思ひ出したのであるが、十二月九日は村の氏神様の祭である。バイカル湖畔でこの日を迎えるとは不思議な巡り合わせと、遥かに行く先の無事の祈りを捧げた。

いよいよ列車はさらに西へ走り続ける。このころからシラムが猛烈に繁殖して、夜も眠れぬようになり、列車は暗くて寒くてシラム退治をすることもできず、毎日苦

痛の連続であった。さらに四日走り続けて、十二月十四日、中央シベリアのオビ川流域の町ノビシビリスク駅に停車した。ここで待望のシャワーに行けることになった。このシャワーは、極東方面に行き来するソ連の軍隊のために設けられてあるもので、素晴らしいシャワーで湯及び石けんは使い放し、衣類はスチームを通して殺菌殺虫を行うため、シラミは全滅して、久方ぶりに蘇生の思いをした。

列車は走り続けて、十二月十八日、オムスク駅に到着した。この地はかつての日独協定により、ソ連挾撃を完了したときは日独の国境とする約束のあった所である。昭和十六年七月、独軍がソ連進攻作戦を開始したとき、満州では日本軍も協定により北方進攻作戦の大動員が行われ、その態勢が完了したことを思い出すが、急速南方作戦に転じ、オムスク目指しての北方作戦は中止されたのであるが、いまさらながら、列車の旅を二十日間もしてやっと到着する広大な地域で、さらに冬将軍のつきまとう作戦が中止になったことは、神の引き合わせとも思いい、ぞっとする感に打たれた。このころより発熱患者が

続発し、列車より降ろされ、入院する患者も出るようになった。

さらに一日走ると平地より山地に入り、トンネルも三つ通過した。険しい山は見当たらないが、いよいよウラル山脈を越えて欧州ロシアに入ったのである。この付近は、昔からボルガの舟唄で有名なボルガ河流域である。

どこまで西へ走り続けるのか、だれも知った人はいない。今日もまた西へ西へと列車はひた走りに走り続けるのである。遂に十二月二十四日、キズネルという小駅に到着した。それから数分後、終着駅であることを知らされ、下車命令が出て、出発以来西へ西へと走り続けた二十三日間の汽車の旅に終止符を打ったのである。

さて下車したものの、付近に収容所があるのか、またどこへ旅を続けるのか不明である。二十六日間の汽車の旅で疲労も激しく、歩くにもふらふらする思いである。

次の命令を待つこと久し、どこでもよい、ぐったりと一夜静かに眠りたいのが全員の切なる願いであった。やっと命令が来て、現在地より九十キロ、四泊五日で徒歩行軍することに決定、直ちに出発であった。昼間から降り

出したボタン雪はとめどなく降り続けている。付近の家々はすっぽり雪をかぶり、樹木は雪の重さに耐えかねるように頭を下げている。

いよいよ出発をして行く。道路に新雪が積もり、膝までほそりほそりと足が入る雪を踏みしめながら、リュックサックを背負い、一枚の毛布をすっぽりかぶり、みんな無言で歩いた。今日は十二月二十四日、冬至のころで、日本でも一年中で一番昼間の短いときである。当地方は北極に近く、昼間は四時間くらいしかなく残りは夜である。歩き出してから間もなく、雪に埋もれた民家の窓越しにランプの光に照らし出されたクリスマスツリーを見かけた。家の中はさぞ暖かいことであろうと思いつつ、このマルクス主義のソ連国家で、なぜに、クリスマス前夜祭の夜とはいいながら、お祭をしているのが不思議でならなかった。(後でわかったのであるが、スターリンが革命後十五年にして宗教の必要を認め、宗教の自由を許可したのである)このとき、ともに歩いてきた松島様が、一曲つくったよ、読んでみますよと聞かしてくれた。

クリスマスの明かり踏みつつ捕虜のむれ 行くへ知らずに うえつつかれつ

この句は自来、毎年クリスマスを迎えるたびに思い出され、当時をしのび、私の生の続く限り毎年感激にふけることであろう。

歩き続ける中に夜は明け、一昼夜歩き続けた。さらに昼間の四時間を歩き、夕方、農作業小屋に案内され、土間でごろ寝をして一夜の仮眠をとることになった。夕食受領の指示あり、早速飯盒を持って受領してみると、エンプクがパラパラと入った塩味のついたかゆである。一気に飲み干して夕食は終わりであった。夕食終わり、その場で横になりたいほど寒さと疲労のため疲れ切っていたのであるが、ふと凍傷の恐ろしさを思い出し、友人たちと七人でたき火をしながら暖をとり、靴下・手袋・防寒靴を乾かし眠りにしたが、なかなか眠れなかった。眠りについたと思うと小便である。翌朝まで三回も便所に通った。

朝食は昨日の夕食と同様で、黒パン二百グラム支給された。今朝は雪はやんでいたが、寒さは厳しく、零下二

十五度だと知らされた。今日もまた雪道を歩き始め、それから二日間、夜とも昼ともわからぬ不規則な行軍・仮眠を続けた。行軍中お互いに話し合ったのであるが、こんな苛酷な行軍を強行することは、我々を屠殺場へ連行しつつあるのではなからうか、それなれば最後の一暴れも覚悟せねばならぬと、悲壯な行軍であった。

五日目の朝だった。独人先輩捕虜が、ソ連の指示により、そりに積んだエンバクのかゆとパンを持参して、我々を慰めてくれた。彼らから種々生活の様子も聞き、捕虜生活を送っていることを聞き、やっと胸をなでおろしたのであった。もう収容所も近い。遥かに雪原の彼方に建物も見えれば、煙も立ち昇っていた。元氣百倍して歩き、日没前にやっと五日間、九十キロの雪中行軍を終え、収容所によりやくたどり着いた。十二月二十八日夕であった。朝鮮国境のクラスキーを十一月二十九日、汽車で出発以来、まる一か月の旅である。

この五日間の雪中行軍のため、凍傷患者は軽傷を入れれば二百人にも達し、手や足を切断した者も数人に及んだ。ここに到着して初めて明らかにされたのであるが、

エラブカと呼ぶ町で、ボルガ河畔にあり、人口二万そこそこの小さな町で、帝政ロシア時代は修道院の町として栄えた。ボルガ河畔に教会が立ち並び、我々は付属建物に収容されたが、白壁のレンガ建ての立派な建物であり、教会の礼拝堂の屋上は尖塔となり、黄金の輝きを放って過去の面目を保っていたが、内部は、革命の当時傷つけられたイエス様の肖像もかすかに当時の面影を残して哀れであった。現在は倉庫として使われている。部屋割りも終了、私たちは三階の一室に落ち着いたが、体力は極度に消耗し、この階段の昇降は大変であった。

給養の方も相変わらず、エンバクのかゆというよりスूपといった方が的確な表現である。一日三回のスूपと一日一回、黒パン三百グラム支給されるが、少量のため空腹で、戦前の日本の食事を思い出せば食べることに話はずむのであった。暖房もなく、零度前後の部屋で防寒服を着たまのままの生活である。冷え込みと食事の関係で、一夜に二回も三回も小便に行くが、そのたびに三階の階段を上がり下がりせねばならない。通路も階段も、照明は何もない真っ暗である。体力も消耗して、小

便をこらえる力がない。仕方なく通路や階段で放尿してしまふ。一時間もすればそれが凍りついてしまふ。滑るから早く昇降ができない。悪循環の繰り返しである。昭和二十一年の正月は、こうした生活をしながら過ぎていった。

我々が到着してからも捕虜の輸送は続き、一月末には収容人員三千人になった。ソ連当局より労働を課してくるようになった。しかし国際法規では、将校は労働に服さないという規約に従い、断乎拒否したため、ではと自活のための作業はいや応なしに要求され、我々も当然と受けとめ、自活のための作業は組織的に整備されていた。特別作業（炊事・パン工場・清掃・被服・衣料・その他）と一般作業（原木の伐採・原木の輸送・糧秣の輸送その他雑役・農耕）があり、一般作業の原木糧秣輸送は大変な作業で、一台のそりを、馬のかわりに人が十人で綱をつけて引っ張って輸送するのである。この輸送のために十キロも十五キロも遠くへ行くと空腹になり、引っ張る力もなくなってくる。

こうした際につきものは、ダワイダワイと言って、上

地の住人がパンやタバコを持って来て、我々に石けんや布地・タオル・その他上等のものはなおよしと交換にやって来る。空腹のため時計とパンを交換するのも見かけたことがあった。このころから一か月に一度はシャワーがあり、洗面器一杯の湯と小指の先ほどの石けん二個にて、洗って流して終わりである。シャワーで裸になったとき、みんな瘦せた体を見て、尻や股のしわに驚き、お互いにしわを引っ張り合い、情けなかった。私も最低四十五キロまでやせた。

毎月シャワーがありシラミは大変少なくなったが、この収容所に入ってから、毎夜のように南京虫の襲撃である。耐えかねてソ連当局に駆除の申請をしたのであるが、よい薬もないのか、沙汰なしであったが、三月に入り南京虫退治の材料をとりに来いとのこと。支給されたものはれんがとドラム缶・薪木、木製の四人用の寝台を解体し、湯に浸すのである。周囲の壁を熱湯で洗った。終了後ドラム缶の中には三分の一ほど南京虫の佃煮ができていた。それから半年は安眠もできたが、半年後には南京虫は元どおりになった。恐るべき南京虫の繁殖力で

ある。冬は仕方なく屋内に寝たが、夏は小雨が降ってもカッパをかぶり屋外に寝ることがほとんどであった。

かくして三月下旬を迎え、人ソ以来一度も拝んだことのなかった太陽がときどき顔を出すようになった。春の息吹である。一月以来作業がときどきあるくらいで、何もなすことなく、みんなで空腹をかかえて雑談をするだけの生活には、話の種も切れて耐えられなくなり、このままでは健康上も問題があり、鉄条網の中の生活から解放されて、娑婆の空気も吸ってみたい衝動にかられ、みんなで合意の上、ソ連当局に自活農場を要求し、五月からスコップによる耕作をすることとなった。

いよいよ四月半ばを迎え、ボルガ河の解氷が始まり、全面の雪でどこが川かわからなかったのであるが、解氷により川の正体を現し、エラブカの町の側を大きく流れ出した。氷のすれ合う音も次第に高まり、見る見る川幅は二キロにも達した。五月一日のメーデーには氷の流れが少なくなり、解氷の川水がとうとうと流れ、川船（一千トン級）の航行も始まり、このころから冬の間どんよりと垂れこめた雪はどこへやら去って、晴天の日が

続き、冬とは反対に夜間は三時間くらいで白夜であり、野も山も川も動物も植物もすべてがフルに活動の季節である。

このころ、他の収容所に収容されておった人々もさらに三千余人が収容され、満州・千島・樺太・北朝鮮の大佐以下の将校を主体として、警察署長級・会社の重役・政府の要人・合計六千五百人が収容された。

いよいよ農耕の季節となり、毎日交代で千五百人が農耕のため収容所を出て行った。出るときは守衛所で全員一列に並べられ、アジン、ドバ、ツリー、セスチ、ウオルセムと人数を数え、先頭が出て後尾が出るまで一時間半くらいかかった。なぜ五列、いな二列にしても数えないのであろうか。いかに意見をしても駄目で、庶民の頭の程度を察知することができた。

農場では決められた区画（ノルマ）をスコップで耕し、普通の体力のある者は別に苦しい労働ではなかったが、半数に近い人々には大変であったように思えた。しかし、みんな収容所を出ることが何よりもうれしかったのである。作業を終わって帰り、守衛所でまた一列縦隊

に並べられ、出るとき同様に点検を行う。後尾の者は入門するまで長時間待たされるのであった。

ボルガの河船が航行を始めてからは、給養ではいろいろとよくなってきた。まず主食のかゆの量質ともに少しではあるがよくなった。魚を煮つけて粉々になったものをスプーン一杯ずつくれるときもあった。さらに白砂糖や紙巻タバコはソ連の一般人には配給がないようで、これはソ連の将校と同じ待遇であった。

このころ、農耕や原木輸送、糧秣輸送等たびたび外に出かけるようになったころ、エラブカの町はずれ付近を夕方になると夫婦で相乗りではなく、一台ずつ小型オートバイに乗りドライブするソ連人を見かけるようになった。自転車でさえまれにしか見ることのできないこの国で、夫婦一台ずつオートバイを所持してドライブを楽しむ人間がいる様を見て不思議に思い、政治部長に、あれは何者ですか、ソ連憲法に背く人々ではありませんかと質問したのであるが、政治部長は、あれはおのおの能力に応じて事を処しているのであるから、当然のことだとの返答であった。一般庶民の生活のできることはなく、

何か特権階級の行動としか思えなかった。

六月二十日より五十人編成で十五キロ離れた山林へ、炊事用の薪木伐採の作業のため派遣され、山に到着してみると、宿舎は独軍の将校捕虜が構築した半洞窟の小屋で、地上に土の屋根が出てあり、内部は中央に通路両側に二段に丸太で寝台をつくってありわら布団を並べてあった。その夜、何知らず眠りにつくや、さあ大変、南京虫の来襲である。こんな小屋に南京虫がおろうとは、ローソクの火で点検すると、丸太の割れ目に列を作っている。その夜は皆んな露天で仮眠をした。その後はわら布団のわらを出し、袋の中にもぐり込み、中から閉じて寝たり、木陰で寝ることもあった。

山林内では七月半ばよりいろいろな茸が開始め、野草もよく繁って、空腹を満たすには絶好の季節であり、場所である。茸の中には毒茸もあれば、笑い茸もある。同行しておった軍医が知らずに笑い茸をスープにして食べ、二日間笑ったり踊ったり過ごしたこともあり、ソ連人に良否の教えを乞うてふんだんに食べ、捕虜生活に入って初めて満腹の日々を過ごすことができた。

山の木はシベリアの赤松・モミ・トガ・白樺がほとんどであるが、木のよくのびていること、曲がった木のな
いこと、日本の山林に比べ美しかった。八月十日、山の
作業を交代して収容所に帰って来た。

このころ、独軍捕虜が移動を開始しており、今まで収
容所で使用しておった自動車は独軍人が担当していた
が、移動のため日本人が交代することになり、十人の割
当て命令により私もその一人に入り、翌日から毎日工場
に行くことになった。

自動車工場に行くようになってからは、憂うつな収容
所を出て自動車で行動できる。時にはソ連人宅を訪れる
こともあり、糧秣を輸送することもあり、いろいろの食
物を手に入れることもできる。車の修理のために火を使
うこともあるため、煮ることもできる。九月の取り入れ
のころになると馬鈴薯など一日数回倉庫へ輸送する。夕
方の最後の一車分の中、若干積み残して工場に持ち帰
り、工場の床下にかくして、翌年の五月ころまで逐次出
して食べたり、スペシャルをつくる材料としたり、こん
な恵まれたところはほかになかったように思った。

これに加え、工場では独軍人が折りたたみ式の両刃の
ナイフ・シガレットケース・スプーン・剃刀をつくって
白慢そうに我々に見せ、バザールに売って換金している
のを見習い、彼らのできるもの我々日本人にできないこ
とはないと発憤し、工場長の目を盗んでつくり、また収
容所に材料を持ち帰ってつくったり、独軍人に負けない
ものをつくってかせいだルーブルで、バター・卵・牛乳
等を買って求め、スペシャル料理をつくる材料とした。

スペシャル料理もときどき収容所に持ち帰り、戦友た
ちにも与えて大いに感謝された。おかげで五十六キロに
回復し、体調も順調になった。

十一月を迎え、遂に本年度の日本への帰還は絶望と
なつてあきらめた。いよいよ酷寒とほとんど夜の季節が
訪れ、ついに年も暮れ、二十二年の新春を迎えた。木工
場で作業するものは木を丸くして、左官の作業する者は
石灰で丸い重ねのお供えの餅をつくって、所々に飾って
正月気分を出しただけで、特別食も出ることなく、平素
と変わらぬエンバクと黒パンの正月であったが、新しき
年を迎え、今年こそは祖国に帰れることを祈り、お互い

に帰国の日まで体を大切に頑張ることを誓い合った。

エラブカ収容所に入所以来、ソ連邦政治部員のクロイチェル女史の指導のもと、壁新聞や日本語に翻訳したソ連憲法や、その他政治書籍等によりソ連を紹介するとともに、思想教育を我々日本人に対して行ってきたが、今年に入りさらに強力に推進するようになった。日本人の中にも進歩的な分子もあり、ソ連当局の手先となり、思想教育を担当する者も数人おり、日本人でありながらみんなから警戒された。しかし大部分は日本軍将校である。そう簡単に洗脳されてたまるものか、さからわず長いものには巻かれておけ、我々の目的は一日も早く帰ることであるというのが全般の本心であった。

去る収容所の一年間、栄養失調で、あるいは肺結核で亡くなられた方々が三十数人に及んだ。冬季間の死体は板で棺桶をつくり、凍結のため埋葬ができないため墓地に運んで解氷までそのまま安置してきたのであるが、民衆がその死人の衣類を全部はぎとってしまうため、ソ連当局の指示により、その後は裸のまま棺に入れて安置したのであった。いかに民衆が衣料に欠乏していたかがわ

かる。いつ我が身に回って来るやもしれずと思いつつ、こんな地で亡くなっていく戦友たちは本当に気の毒で、なかなか成仏できないことであろうと思われた。

昨年一か年の収容所生活の体験で要領もよくなり、案外平穏な半年を過ごし、いよいよ六月、ソ連では一年中で最良の季節を迎えたのであるが、六月に入り腸チブスが発生し、次々と死亡者も出る。収容所は全力を挙げ防疫態勢を強化、絶滅に全力を尽し、約一か月で終息をすることができたが、二十数人の死者が出たことは、返すに返すも残念であった。

いよいよ八月に入り、ソ連政治部員から人民投票を要求され、課題は「日本天皇の在位を欲するや否や」である。そのまま投票して在位を欲する回答が多かったときは却ってまずくなり、帰還を遅らされて大変である。全般に規制して、ある程度、在位を欲せずの方を多くして投票に臨んだのであるが、結果は在位を欲するが多くて、あるいは祖国への帰還を延期されるのではと心配もしたのであるが、ソ連当局としては、こんな将校ども、いかに教育をしても効果はない、早く帰してやった方が

得策と思つたのか、九月末になつてつぎつぎと帰還者名簿が発表され、私も四回目の発表で名簿に出て呼び出され、喜び勇んで守衛所前に集合したのであるが、ガレー・ジコマンダ・ストイ（自動車工場勤務者は中止）の命令で、いかんともしがたく残念至極、足どり重く宿舎に引き揚げたのであつた。

その後も次々と、一昨年四泊五日で雪の中を歩いて来た道を、キズネル駅に折返し歩いて出発して行つた。六千五百人中、佐官の方々と私たちとともに特別作業に従事しておつた方々と四百人が残され、収容所はひっそりと閑散な光景となつてしまつた。その夜は残念で残念で眠れなかつた。ソ連のことだから、日本へ帰還だといつても、どこかへの移動にとどまるかもしれないと思ひながら、残された者はみんな移動でもしたかつたと思つた。今年もまたこの地で越冬を余儀なくされ、毎日自動車工場へ通つた。

いよいよ昭和二十三年正月を迎えた。昨年同様の正月を送り今年こそはと帰国の希望に燃えて、残留員一同張り切つた毎日を送っている中、一月末となり、昨年末出

発して行つた方々から、日本より便りが来るようになり、日本の状況もわかってくる。やはり帰還は本物だったのかとまた残念がる者もいた。しかし、我々も今年の帰還は間違いないぞと元氣百倍、明るい希望に満ちた日々を送つた。

いよいよ五月一日を迎え、ボルガ河は過去二年にも増して大増水で、とうとうと流れていた。突然ソ連当局の命令で、自動車工場勤務者の中から四人を選び、国营農場のトラクターの運転に行けとのこと。最初はソ連に奉仕するようなことはしたくなかつたゆえ、トラクターの運転はできないと拒否したのであつたが、日本人首席から、ご苦労だがみんなのため、今年の祖国帰還のためにも犠牲になつてくださいと懇願されるまま、四人の仲間入りして、五月四日、国营農場へ出発した。

収容所から八キロの地点であつた。ここには農機具類の不寝番をする六十三歳の老人が一人いて喜んで迎えてくれた。宿舎は貨物列車の箱のようなのが置いてあり、その中は二段にして、四人就寝できるようになつており、今まで老人が一人で起居していたのであるが、私

たちが到着するや片づけてここへお寝みなさいと、自分は牧草の中へ帆布をかむり寝るのだと言う。なかなかお人好しそうな爺さんである。

翌日よりいよいよトラクターの運転を始め、バレイシヨの耕耘・植えつけ・覆土と一貫作業を毎日繰り返した。ときどき破損した部品受領や修理のため工場に行くこともあった。作業は、私たち日本人は交代で運転をし、作業機はソ連人が行い、三人で運行した。一度に八列植えつけていき、片道千五百メートルぐらいを往復した。飯は現場支給で爺さんがつくってくれた。毎日爺さんの末娘が家から一升入りの容器で牛乳を持参する。それを爺さんが私たちにも飲ましてくれる。私たちが町に出ると、珍しい物があれば買って来て爺さんを喜ばし、お互いにうちとけ仲よしになった。

日本人の首席からも、我々はソ連人に接する機会が多いため、六十歳以上の年寄りを捉えて、ツア時代と現在の社会主義国との比較した批判を聞いてほしいと要望されてあったことから、今日までも数人のソ連人年寄りに質問をするが、みなそんなこと言えないと口が固く、失

敗に終わっているため、今度こそは最終最良の機会だと思ふ魂胆から、できるだけ爺さんのご機嫌をとるように努めたのである。

ある日、背広服を着た堂々たる紳士が爺さんに面会に来て、私たちは驚いた。ソ連では背広服を着た人はなかなか見かけることはまれであったからだ。夕食のときに、今日の面会人は息子さんかと尋ねると、私の長男で、レニングラードで自動車工場の技師だ。私には四男一女があったが、三、四男は独ソ戦で、オデッサの戦いで戦死、二男はクイブイシェフで鉄道の技師をしている。一女は毎日牛乳を持ってくる末娘だと話してくれた。さらにこちらから質問を続けた。爺さんは二人の技師をしている立派な息子さんがいるし、ソ連では六十歳になると老齢年金が支給されるのに、露天で寝ずの番なかなぜするんだ、理由をきかせてほしいと質問したところ、そんなことは絶対に言うことはできない。うっかりすると監獄だと口を閉じた。これ以上聞いて気分を悪くしてはと、それ以上質問することはできなかった。この爺さんはトラクターはじめ農具の不寝番である。

トラクターを農場の片隅にでも一夜でも放置すれば、必ず部品がなくなるのである。工場でも修理中、ちょっと油断すると工具がなくなるのは普通である。工場長にわけを話すと、盗られる者が悪い、十分監視をしないから盗られるのだと言う。この国営農場では無理な要求もなく、むしろ楽しい毎日で、いつの間にか六月下旬を迎え、六月二十七日に収容所へ帰れの命令が出た。

いよいよ六月二十六日、夕食時、五人で前から準備していたウォッカで別れの乾杯をし、さらに爺さんに飲ませた。その席でツア時代と現在の社会の対照批判をぜひ話をして欲しい、決して他人に口外しない約束で頼み込んだ。すると爺さんは、君たちがそれほどまでに聞きたいのなら、この国ではだれにも話すことなく、四人の胸に秘めておくことを約束しようとして固く手を握り合い、ぼつりぼつり話し出した。

一口に言って、私はツア時代がよかった。当時が懐かしい。このエラブカの町には、あのメイנסトリートには、今はショウウインドが残っているが、今は何も陳列してないが、当時はヨーロッパ各国の品物はもちろん、

支那、日本と世界各国の商品が陳列され、何でも自由に買うことができた。当時この周辺の土地は一人の地主が所有していたが、今は国の所有に変わっただけで、いかに働いても普通人では生活が精いっぱい、何も持つこともできない。私の息子も工場の技師であるが、給料は大したこともなく、妻と子供二人を養うことが限度である。親に送る金なんかとても及ばない。私も老齢年金はあるが、ほんの微々たるもの、老先が短くなるとときどきは美食もしたい、酒も飲みたいとなると、こんな不寝番でもして働かねばならないのだよ。以上私の言ったことは、先ほどの約束を確か守ってくださいよ、もしばれたら私は最低八年の監獄だよ。そうなったら私の人生はもうおしまいだからとつけ加えた。

この爺さんの話こそ、私も三年近くソ連に生活し、色々の人々と接し、見たり聞いたりしたことを総合して、ソ連人の大衆の本心ではなからうかと想像された。六月二十七日、爺さんと永久の別れを惜しみつつ、手を握り合って別れを告げた。

収容所に帰ってみると、いよいよ帰還だとみんなの顔

は明るかった。その夜寝床でいよいよ日本に帰れると思うと、三年近くにわたる過去を思い浮かべ感慨にふけた。その中で、ソ連人大衆のお人好しには深い親しみを感じ、反対に国家となるとなぜあんなに嫌らしい国であるのか。

六月三十日、命令にて、七月二日、エラブカ出発、全員日本に帰還を伝えられた。あなた方は最後まで残られてご苦労であった。歩かないでエラブカ港より二昼夜船で航行してカダンに至り、シベリア鉄道に乗車する命令要旨であった。七月一日は大掃除をして帰還準備をした。七月二日、朝出発して、ボルガ河のエラブカ港に向かう。約二千メートル、三年近く生活をしたエラブカの町を振り返りながら、エラブカ港に到着。直ちに乗船した。

船は一千トン級の白船で河畔からは毎年眺めた船であるが、船室は初めてである。乗船して初めて知ったのであるが、船室にも三等・二等・一等・特別室と区分されており、我々は三等船室を割当てられ、輸送指揮官から上甲板及び二等以上の船室には立ち入るべからずと達し

があった。が川船のため三等船室は水面すれすれのところであり、河岸があり遠望は全然駄目であるため、思案の結果、代表を決め、船長に上甲板に昇れるよう直接交渉を行った。船長はご自由に昇降して下さいと許可された。みんな思い思いの上甲板に昇り、船内を見学、乗客とも語り合い、交歓の場面もあちこちで見られ、三等船室は空室になり、みんな上甲板で遊んだり寝たりで二日間の航行を楽しんだ。晴天に恵まれ、沿岸の風景を遠くまで眺め、ボルガの船旅を満喫することができた。

七月四日昼過ぎ、タタール自治共和国の首都カダン港に入港した。カダンの近くには革命の指導者レーニンの生地があり、レーニンに学び、マルクス主義者として追放されたカダン大学もあり、レーニン博物館も現存している。人口九十万とかの大都市である。自由行動は許されず、引率で町の一部を見ることができた。

夕方、前に輸送されたときと同じ構造の貨物列車で極東方面に、いな、日本に向かって出発した。三年前の輸送とは違って輸送指揮官はエラブカ収容所長、数人の係官も収容所の関係の方々に、外から施錠されることもな

ければ開放のまま、雪のシベリアではなくて真夏の真緑のシベリアの旅である。ロシア語も片言ながら話もできる。若干のルーブル貨も持っており、買物もできる。収容所でつくった手製の麻雀パイ（収容所の娯楽で最低三百組のパイがあった）で輸送中明け暮れしたものであった。

前回の往路は二十六日間の汽車の旅であったが、今回の復路は、戦後三年を経過しており、二十日間までにナホトカに到着できるかと予想したのであるが、やはり広いシベリア、二十四日を要した。途中ウラル重工業地帯のスペドロクスクも、大森林に囲まれたビルの林立する工場地帯を見ることができた。ノビシビリスクでは、前回と同様シャワーを浴びることもできた。

この付近の小さな駅に停車したとき、彼方より一人の男が懸命に走り寄って来る。我々のそばに来て、日本人であることがわかった。皆様いよいよ日本へダモイですかと尋ねる。多分ダモイだと思いますがと話を続ける。私たち、向こうに見える製材工場に百五十人収容され、製材の労働に従事したのであるが、栄養失調で次々三十

余人が倒れ、翌年、発疹チブスで次々倒れ、現在生き残りが二十人おります。一日も早く帰りたいですね、もう今年は帰れるでしょうかとまことに切なる訴えであった。我々の仲間も昨年大部分が日本へ帰っている。もう少しの辛抱だ、体を大切に頑張ってくださいと激励して、手を振って別れを告げたこともあった。

この付近一帯はオビ河流域で、横断するのに六日間余走り続けたのであった。さらにエニセイ河流域を走り、九州と同じ面積と、世界で一番深い淡水湖であるバイカル湖の南部の一角を通過したが、周辺は峨々たる岩山で、十八時間を要し、半トンネル、またはトンネルが八十余を数えたが、それ以上あったと思われる。また水のきれいなこと、他の湖水の到底及ばぬ水と思われた。その水面に周りの峨々たる山の影を映し、白船が航行する風景は、絵を見る感にうたれ、冬のバイカル湖とは又格別の趣きがあった。

さらに極東の水の都イルクーツクの駅に停車した。前回には雪に埋没した白銀の町であったが、今は深緑の映える水の白壁と緑がとけ合った古い町を目にすることがで

きた。次でチタを通過、いよいよ満州の国境に沿って汽車は走り続け、ハバロフスクも通過、七月二十八日ナホトカ収容所前の海岸に到着。汽車でカダンを出発以来、二十四日間の緑のシベリアの旅を終えたのであった。

下車と同時にみんな波打ち際まで歩み、入ソしたとき、ポシエットで海をさらばして以来、丸二年九か月ぶりの海であった。磯の香りが鼻につき、こんな磯には香りがあったのかと思われた。この水平線の彼方に祖国日本があり、いよいよ祖国の土を踏むことができるのかと思うと、万感胸に迫る思いであった。やがて収容所に案内された。

いよいよ部屋に入り、二十四日の汽車の旅の疲れをと思いかけたとき、整列の号令がかかり、部屋にも入れず、夕食もとらず、立ったままで、貴様たち日本軍将校に告ぐと呼びかけた。日本人（進歩的分子でソ連の手先に使われている者）が、貴様たち日本軍将校の汽車から降りて以来の様は何だ。それが元日本軍将校か。ソ連に三カ年もおつて何の洗脳をしてきたのだ。もう一度送り返したるかとききおろし、一人で三十分も四十分も徹を

飛ばすのである。入れ替わり立ち替わり数人の日本人に、午前一時ごろまで五時間余にわたりしごかれたのであった。中には倒れる者も出る始末で、ここまで来て今度は日本人にあって、こんなにまでしごかれねばならぬのか心外であった。

翌日からは、別に教育もなければ毎日平穩な日々であったが、ここでも南京虫には夜な夜な苦しめられた。日本から船が来ないとして、十五日間待機した。いよいよ八月十二日乗船の日を迎え、埠頭へ歩み出したのであるが、それでもまだ一抹の不安はあった。三年間たびたびだまされてきたからである。いよいよ埠頭に到着して、遠洲丸と日本字で書いた船が見えたとき、今度こそ本当だとみんな目にうれし涙を浮かべていた。ソ連の大地をけとばしてタラップを昇る足並みはまどろこしかった。

ようやく遠州丸に足を踏み入れ、日本の看護婦様のご苦勞様でしたの言葉を聞いたとき、初めて日本に帰れる実感がわいて来た。船室の割当てがあり、船倉内でおること数分、全員後ろ甲板へ出るの号令があった。船はまだ岸壁を離れてはいないにもかかわらず、だれが隠し

持っていたのか、国旗掲揚・皇居遥拝・君が代合唱を終わりにかけるころ、船長が来て早く国旗を降ろしてください。日本は今、国旗を掲げることができませんと、早速降ろされたが、みんな感激の一時であった。

次いでいよいよ船が岸壁を離れたとき、氏名を呼び五人、後甲板に出ろの命令があった。ソ連抑留中、進歩分子としてソ連の手先となり思想教育を施した者たちであった。殴る、蹴る、最後の果て綱で縛り上げ、お前たちは売国奴だ、全員の敵であった、祖国の復興を阻害するものである。日本海に投げ込んで消してやるという事件もあり、前にも事実海に投げ込まれたこともあり、船長も心得たもの、この二千余人は私が日本へ無事届ける責任があります。どうか私にまかしてくださいと言うや、船長室に別収容された。舞鶴到着と同時に進駐軍に引き渡して結末となった。

船は静かな航海を続け、日本に向かう。日本の船の中の一夜は殊のほかよく眠れた。十五日夜明け方、内地の山が見え始める。あの灯台は宮津港の灯台だろうとか、甲板は祖国の山々を見つめる人々であふれた。やがて船

は舞鶴港に入り、両岸からのセミの声が珍しく懐かしかった。午前十一時ごろ、終戦後まる三年の終戦記念日、祖国に上陸し、なんとか生き長らえて抑留生活に終止符を打ったのであって、生涯忘れることのできない思い出と体験を得ることができた。

ただ残念なことは不幸・病気に栄養失調に倒れ、遠くエラブカの果てに残してきた戦友と喜びを共にすることのできなかつたことは、かえすがえすも残念である。遥かにご冥福を祈るとともに、こうした戦争犠牲者を出さない新しい平和な日本の建設に努力することを誓う次第である。

シベリア捕虜生活の体験

大阪府 小森 淳 男

この記録を書くに当たり、無念にも彼の地にて亡くなられた多くの戦友同胞諸氏の御霊に対し、ご冥福を祈る。